

育苗|田植|秋の収穫に向け第一歩

天候に振り回されない技術を確立し、稻刈りまで乗り切ろう！



コシアブラ



モニジガサ

一雨毎に里山の若葉
がその色を増していま
す。総ての生命が最も
輝きを放つ季節です。
私の大好きな山菜の季
節でもあります。コゴ
ミとモミジガサだけは
毎年1~2回、春作業
の合間に近くの山に採
りに出かけますが、タ
ラの芽、コシアブラ、
ワラビそして少々のゼ
ンマイは家の地続きの
山で家族が楽しめる程

度のものは採取することができます。里山の暮らしを堪能しています。県内の田植も最盛期を迎えていきます。農家にとって最も喜びの時期は収穫期なんでしょうが、農家は昔から田植には特別な思い入れがあつたようで、今ではすつかり機械化されていますが、今でも何となく華やいだ気持ちを引きずっているのは私だけでしょうか。

昨年の高温で種類の休眠が深く、浸種の際には注意するようにとの事前指導を行われていきましたが、発芽揃いなどはいかがだつ

たでしようか。身近なところで発芽障害の情報をお聞きていませんので指導が徹底され、成績が出たのかかもしれません。私も浸種のはじめ2日間は15°Cに加温し、浸種時間を長めにとつたお蔭かどうか発芽にはまつたく問題がありませんでした。

むしろ、天候が安定せずに異常な高温日と低温日が繰り返されるなど、育苗ハウスの温度管理に苦労されたのではないでしようか。30年位も3千枚のJAの育苗受託をしていますが、いままではコシヒカリだけでした。今年は山地の残雪が多くてハウスの準備が間に合わなかつたのでしょう、急遽こしいぶきの苗を引き受けることになつてしましました。こしいぶきの苗は伸びが悪いことを承知していましたので夜間温度を高めに、散水も多めに管理していましたのですが、出荷1週間前になつても2葉齢の7~8

タツと止まつてしまひました。発芽苗が入つたのが4月の14日、出荷は5月の7日に決まりますから、その間に2・5葉^{12枚}に仕上げなければなりません。根の張りだけは良すぎるほどになつていましたが、「おしかり」を受ける覚悟だけはしていました。皮肉なことに隣の自家用のハウス内プール育苗の苗は極めて順調に生育していました。ところが14日の朝、苗を見て自分の目を疑つてしまひました。ほん強に伸びていて、ほんか。苗丈が一晩で2以上も伸びてくれたことがあります。それまでも夜間温度を高く保つように管理してい温そのものが低かつたのでしよう。「良い苗になりました」とお褒めをいただきましたが、温そのものが低かつたのです。そこで、「良い苗になりました」とお褒めをいただきましたが、終わったも同然なのでは受託苗の出荷が終われば私の春作業の半分は

さて、有機について
は今年も新しい試みを
することにしました。
田植時期を5月末まで
遅らせることにしたこ
とです。理由は「草と
の鬭いの期間を短くする」
ためです。本田での稻
の生育期間が短くなれば、
それだけ雑草処理期間
も短くなるからです。

【裏面に続く】

「除草はチエーンで4~5回実施する」と書かれています。何とか「2~3回」で対応できないかと虫の良いことを考えていました。

週間天気予報などは実的に中するようになりますが、中長期の天気予測は中々難しいようです。しかも最近では「異常気象」が当たり前と思えます。いかなる天候にも対応できるような稻作技術が求められていています。いるのでしきょうが、口で言うほど簡単なものではありません。それでも、育苗・田植は米作りの第一歩ですから理想を追い求めています。張りたいもの

Agri-s の



VOI. 17

はないかの予想です。

最近の田植機

東日本大震災から約二ヶ月が経過しようとしています。また、津波による被災地の復旧が始まろうとしています。が、農地関係の復旧は、中途が立たない所がかなりあるようです。

東日本大震災から約二ヶ月が経過しようとしています。また、津波による被災地の復旧が始まろうとしています。が、農地関係の復旧は、中途が立たない所がかなりあるようです。

一カ月により、さらに耕耘時においてハンドル操作のみで植付機能も自動と言う物もあり。この散布も同時作業できるを行ない、さらに施肥、除草剤散布及び殺虫剤散布も同時作業できるというものです。

さらにアタツチメントの付替えで直播、除草、排水対策の溝切作業等が可能。ただ価格がアタツチメントフル装備で500万前後が、高いと見るか安いと見るかは各自の判断となります。

はないかの予想です。

入り、田植機を吊り上げ農道まで100㍍移動し、トラックに乗せ、農家さんと相談。10年前の機械のため、修理を諦め機械の入替えとなりました。車業界なら絶対リコールになる状態でも農機業界はダメみたいですね。

田植作業中、車輪が動かなくなつたとの連絡で現場急行。現場を見てがく然。車体フレームと後輪車軸フレームが分離して、後輪が植付部のフレームに引つかかる状態等と、初めての経験。問題は農道の近くならクレーンで引き上げと考えるも、現車は農道から100m先で、深さ50センチという状態。考えた末、建機のユンボで圃場内に

うと、都内数か所でデモが何回か行われました。（4月20日現在）デモ参加団体に農産物生産団体がかなりあつたようでした。（私の処にも参加要請がありました。）案内文の中で、先日来の放射能飛散に伴う農業被害について、作付け制限値について、ある流通団体の方が異を唱えられていました。国、県の指示で、作付け制限地域の汚染された農地は放射能の数値が下がるまで作付け制限、もしくは作土の入替をするというが汚染され

5割以上削減した栽培方法を組み合わせた取り組みを行う事。この環境保全型農業支援対策は6月末までの申請が必要との事です。該当する方は忘れずに申請されてください。（エコファーマーの申請は奇数月が締切です。）

ろうとの提案をされていました。
これには、賛否両論があろうかと思いますが、考えさせられる問題だと思います。

《Agri-S 記》

た広大な耕地面積からすれば時間的にも不可能ではないかと。当然、工事期間中の作付けは出来ない。年数が掛かれば掛かるほど農地は荒れるし、農業者の年齢は高齢になる。果たしてそれで後継者は残るのだろうか。逆に考えて汚染された農地に吸着率の高い、ほうれん草をはじめ、米なども作付けし、バイオ燃料と共に供給したうえでどう



《Agric-S記》